

門前の小僧で覚えたうちわ作り。  
ご先祖さんに感謝して、  
誇りを持ってやっています。

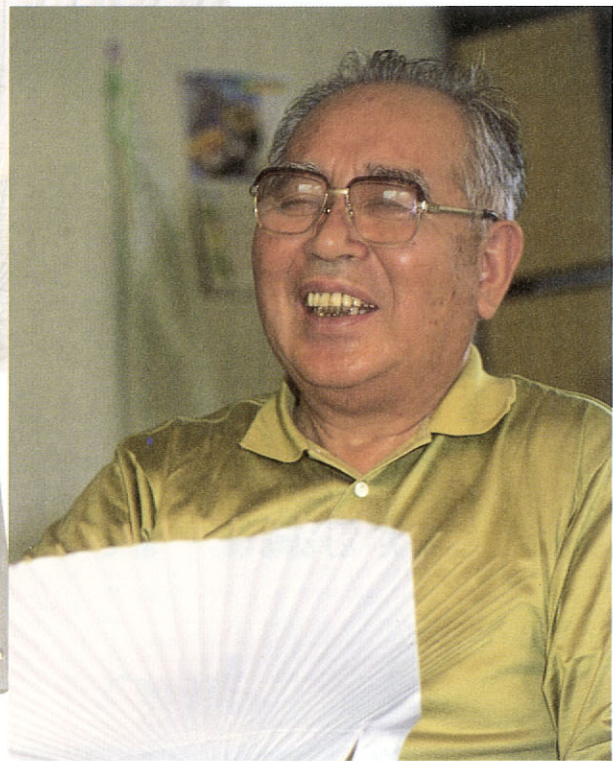


来民うちわは、手すきの和紙に柿渋を塗った独自の製法で、丈夫さと素朴な味わいが魅力となつています。扇風機やエアコンの普及で需要は減つたものの、最近では和風のインテリア小物としても人気を呼ぶ渋うちわ。伝統の手作業をいまも守り続ける鹿本町の栗川正一さんを訪ねてみました。

## うちわはPR商品の先駆け

「くちなしの実もて色ぬる故郷の来民のうちわ春の日に干す」  
鹿本町役場に立つ宗不旱の歌碑。幼い日に来民で過ごした歌人の目に、懐

かしく残る故郷の光景が、うちわなしのようすでした。  
「うちわ作りが盛んになったのは明治時代。酒屋や呉服店が宣伝用に、うちわの裏に名前を入れてお得意さんに配りだしたんです。いわばPR商品の走りですよ」  
鹿本地方は昔から竹が多く、手すき和紙も鹿本町や玉名郡の三加和町で作られていました。渋うちわ作りは全て手作業で、竹を細かく割っていく骨作りに始まり、紙張り、型切り、渋塗り、乾燥など細かい作業工程は二千以上にもなります。  
来民うちわの由緒は古く、江戸時代の初期に四国から来た僧が製法を伝えたとする説や、寛永年間（一六二四～一六四四）に藩主の細川忠利が奨励して作らせたなどの話があります。また寛



栗川商店三代目店主  
栗川正一さん

一九三五年 鹿本町生まれ  
一九四一年 熊本県立商業学校卒業  
一九五〇年 戦時中、途絶えていたうちわ作りを再開  
一九七九年 熊本県伝統的工芸部理事者

政八二七九〇年の記録によると、来民では四、五百軒もの家がうちわ作りをしていたほど。時代が下って生産が最盛期だった昭和十年には、年間六百万本が作られ、中国やハワイへも輸出されていました。

## 柿渋を塗る製法は来民独自のもの

「うちわ作りはだれに習ったというわけじゃありません。私が子供のころは初代の祖父がまだまだ元気で、うちわ作りも盛んなころ。門前の小僧で自然と覚えたんでしょうね」  
ほかのうちわ作りの産地でも、竹の骨に手すきの和紙を使っていますが、柿渋を塗る製法は来民独自のもの。渋

を塗ることで和紙の毛羽立ちを抑え、紙がピンと張ってゴシも強くなり、丈夫さが増します。また虫が付きにくく、時間とともに色合いが落ち着いて、独特の味わいが出てくるのです。  
使う柿渋は、栗川商店の自家製。まだ柿の青い夏のうちに、あるじ自ら山へ出かけて柿を採り、ちぎった柿はつきつぶして水に浸し、渋を取り出します。和紙の品質によつて渋のり方も異なるため、渋の濃度の加減にも四十年以上の勘がモノをいいます。  
できあがった渋うちわは、竹の柄が心地よく手になじみ、軽くあおぐだけで爽やかな風を呼び込みます。  
家内工業による渋うちわの生産は、昭和三十年代後半から急速に衰え、現在、来民のうちわ業者は四軒。渋うちわを作っているのは二軒のみです。  
「この町でうちわ作りが衰退したのは電気製品のせいだけじゃなく、土地が豊かだったから。何をやっても食べていける。昔から職人が育つところは、田畑に恵まれないところが多かったんですよ」

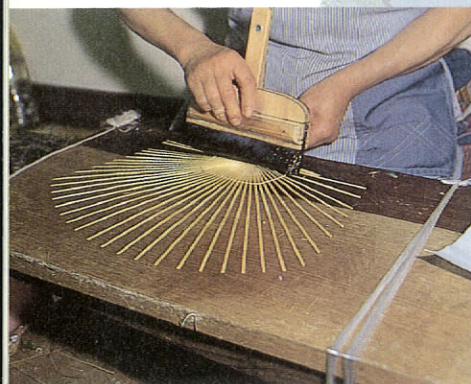
## 誇りを持って伝統の技を次世代へ

業者の減少とは反対に渋うちわの人氣は上がり、いまでは注文に応じきれないほど。山鹿灯笼まつりの千人踊りにも欠かせず、県内外の各種催しからは依頼が相次ぎます。  
「口に出して言わずとも、息子は四

代目を継いでくれました。親が誇りを持って仕事する姿を見とつたからですかねえ。出先で、「初代には世話になった」と声をかけてもらうことも励みになったんでしょう。昨日や今日の仕事で信頼ができるもんじゃやない。だから、ご先祖さんには頭を下げて感謝すると、いつも言つとるとですよ」  
本業の傍ら、地元や各地のイベントでうちわ作りの講習に忙しい栗川さん。  
「皆さんに喜ばれてはがきや電話をもらうのが一番嬉しかですね。その中からうちわ作りに取り組もうという人が出てくるんじゃないかと、期待もしているとですよ」  
話をしながらでも手はなめらかに動き、うちわに当てた刃物の先から苦もなく型取られていく技の見事さ。  
鹿本町では、うちわ生産の全盛期をしのほうと、バチさばきにうちわ作りのようすを取り入れた「来民子供うちわづくり大鼓」も結成されています。  
昔ながらの渋うちわの懐かしさと季節感を求め、毎年七月の県伝統工芸館の展示会は多くの人々にぎわいます。



型切り作業中の栗川さん



貼立(骨と紙を糊付けする)



宗不旱の歌碑(鹿本町役場内)